

COVID-19 禍における看護学生への卒業直前看護技術フォローアップ研修 Report of Nursing Skill Follow-up Training for Nursing Students with Consideration of the Influence of COVID-19 before Graduation

中山 由美¹⁾ 重年 清香¹⁾ 渡邊 敦子¹⁾

NAKAYAMA Yumi, SHIGETOSHI Kiyoka, WATANABE Atsuko

要旨

COVID-19 禍により臨地実習の体験が少なかった卒業直前の看護学生に対して、就職後のリアリティショックの軽減、職場適応の促進、早期離職の防止を目的とし、藍野大学看護学科からの企画の提案によって実現した卒業直前看護技術フォローアップ研修の実践内容と学生の反応を報告する。研修に参加した看護学生は、看護技術の手技やその根拠を再確認していた。他大学の学生と合同研修を行うことにより人間関係を構築する場となっていた。

梅花女子大学の研修運営の課題は、学生が参加しやすいようにアナウンスを早めに行う必要があった。また、看護学生の不安を軽減するために看護学生が実践したいと考えている看護技術の練習機会を提供することも重要である。COVID-19 禍において、施設毎に新卒看護師に指導する看護技術の項目を把握し卒業前の学生の支援を検討することも重要である。

本報告は COVID-19 禍で新卒看護師となる看護学生への支援方法を検討するための一資料となると考える。

キーワード：COVID-19、看護学生、看護技術、研修、支援

1) 梅花女子大学看護保健学部看護学科

I. はじめに

2020年1月、国内でCOVID-19による感染が初めて確認されて以降、世界規模の感染拡大による看護基礎教育への影響は大きく、全国初の大学の休校およびオンライン授業の要請などがあり、多くの看護系大学はオンライン授業および学内実習やオンライン実習への変更を余儀なくされた。

本学においても、看護学科4年次生は母性看護学実習、在宅看護学実習、総合実習が学内、オンライン実習に変更となった。看護学生（以下、学生とする）は、患者を受け持ち、看護実践能力を養う非常に重要な臨地実習での学習の機会を経験することができずに卒業し、看護師として働き始めるため、不安は計り知れないものであると考えられた。兵庫県看護協会（2021）は、非対面での授業、特に実習が学生に及ぼした影響として、

リアリティ不足、コミュニケーションへの不安、学習力、思考力に影響を及ぼしていると予測している。

今回、実施した看護技術フォローアップ研修は、COVID-19 禍の中で臨地実習に行けなかった卒業直前の学生を対象として看護技術の実践練習ができる機会を提供したものである。COVID-19 禍で卒業する学生にとって、就職後のリアリティショックの軽減、職場適応の促進、早期離職の防止になることを目的とし、藍野大学看護学科から企画の提案があり、梅花女子大学看護保健学部看護学科が協賛させていただいた。この研修は、本来であれば臨地実習で経験される基礎的な看護技術の習得を補い、初めて出会う他校の学生と演習を行う緊張感により新たな環境に旅立つ学生の力になるよう企画された初めての試みである。こ

の研修の実践内容と研修を受けた学生の状況は、COVID-19 影響下で学内実習に切り替えざるを得なかった学生が卒業を迎える前に取り組む新たな看護技術習得への支援方法であると考えます。

以上のことから、卒業直前の看護技術フォローアップ研修（以下、研修とする）の実践内容を報告し、学生の感想などから今後の課題を検討する。

II. 看護技術フォローアップ研修の概要

1. 研修目的

技術の復習および人との関りを通して、就職後のリアリティショックの軽減、職場適応の促進、早期離職防止を目指す。

2. 梅花女子大学の研修項目の決定方法

1) 企画運営

藍野大学大学院看護学研究科研究科長西上あゆみ教授と看護学科長本多容子教授が本研修を企画し、梅花女子大学看護保健学部看護学科基礎看護学分野が協同企画運営を依頼された。そして、企画内容や運営について大学間の調整を図った。

2) 参加希望者と希望技術の選定の経緯

(1) 2月初旬より Google フォームで研修参加希望者を募集した。研修の目的を説明し、参加を希望する場合、Google フォームへの記入および提出をアナウンスした。

(2) 藍野大学が事前調査により選出した項目と梅花女子大学が選出した皮下注射と筋肉内注射、バイタルサイン測定を含む 20 項目を提示し、学生の希望する看護技術を募った。その結果から両大学で実施可能な項目を検討し、「口腔・鼻腔、気管内吸引」「皮下注射・筋肉内注射」「バイタルサイン測定・呼吸音聴取など」「胃管チューブ挿入と管理」「静脈血採血、静脈内注射」「点滴、輸液ポンプ・シリンジポンプの操作と管理」「導尿」の合計 7 項目に決定した。

3) 研修準備

(1) 教員配置の検討

演習項目決定後、演習ブースの設置教室と担当教員を決定した。

梅花女子大学教員 3 名が 1 日目全日および 2 日目の午前中において、「口腔・鼻腔、気管内吸引」、「皮下注射・筋肉内注射」、「バイタルサイン測定・呼吸音聴取など」ブースを担当した。藍野大学教員 16 名は、全演習ブースで 2 名配置になるよう担当した。

(2) 研修方法の検討

2 大学の学生参加数に応じてできるだけ共同グループで行うことに決定した。

次に、3 密を回避するために複数の実習室と教室の使用を検討した。

以下の内容は、梅花女子大学の参加学生に対して追加説明をした内容である。

- ・研修日まで毎日健康管理表に体温、自覚症状の有無を記入し、当日持参する。
- ・体調不良などにより当日欠席する場合はメール連絡する。
- ・交通費は自己負担となる。
- ・ユニフォーム、ナースシューズ、フェイスシールドを各自持参する。

4) 実施日時

2021 年 3 月 9 日（火）13:00～16:00

2021 年 3 月 10 日（水）9:00～12:00

5) 実施場所は藍野大学とした。

6) 学生参加人数

2021 年 3 月に卒業予定の学生のうち本研修の参加を希望した梅花女子大学看護学科 6 名、藍野大学看護学科の学生 30 名が参加した。

2 日間の参加学生は、延べ 48 名（梅花 12 名、藍野 36 名）、2 日間参加した学生は 12 名（梅花 6 名、藍野 6 名）であった。

7) 研修内容と方法

- (1) 現地集合後、ユニフォームに更衣し指定場所に集合した。
- (2) 2大学の共同グループ(4名1グループ)は、学生が自主的に決定した。
- (3) 実施方法の説明を行った。

以下、上位希望7項目の看護技術を学生に提示した。

- ① 口腔・鼻腔、気管内吸引
- ② 皮下注射・筋肉内注射
- ③ バイタルサイン測定、呼吸音聴取など
- ④ 胃管チューブ挿入と管理
- ⑤ 静脈血採血・静脈内注射
- ⑥ 点滴、輸液ポンプ・シリンジポンプの操作と管理
- ⑦ 導尿

次に、1ブースでの体験時間は40分程度であること、各グループで演習ブースを移動しながら演習することを説明した。

各演習ブースでは、担当教員が学生の対応をした。

はじめての取り組みでもある研修について、今後の運営内容などの検討を行うため、研修後に無記名によるアンケートの協力を口頭にて説明し、36名から提出があった。記述内容は、卒業前に不安に思っていること、研修に対しての感想や研修は支援になったか、また、改善点などであった。

- (4) 終了後、一斉解散した。

3. 研修の実際

1) 演習ブースの設営

藍野大学の教員が各ブースの設置を行った。筋肉内注射のブースは梅花女子大学が上半身モデルなどを準備した。

120人以上が入室でき、7ブースを運営できる基礎看護学演習室を使用した。1グループの学生数を4名にし、各ブースは間隔を空けて設営された(図1)。

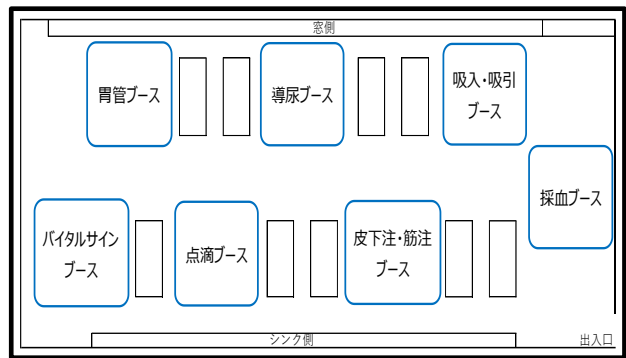


図1. ブース設営

2) 演習説明

以下の内容を藍野大学の教員が説明した。

(1) グループの決定

学生が集合した後、演習グループを自主的に決めるように説明した。その際、藍野大学の学生が2名と梅花女子大学の学生1~2名の合同グループが3つ編成された。他のグループは、藍野大学の学生が4~5名となり、7グループ編成された。

(2) スケジュールの説明

1ブースの体験は40分であることを説明した。

学生グループ間で希望する項目と希望時間を相談し、ホワイトボード(表1)に記入して演習項目と順番を決定した。

表1. 演習スケジュール書き込みボード

	胃管	吸引	点滴	採血	導尿	皮下注	バイタルサイン
9:15~9:55							
10:00~10:40							
10:45~11:25							
11:30~12:10							

3) 研修実施

学生グループは教員の開始と終了の合図で演習ブースを移動し、各ブース担当教員の指示に従い行動した。

(1) 口腔・鼻腔、気管内吸引

ベッドサイドでの酸素吸入や吸引をイメージできるよう Central Piping System 実習ユニットと

酸素流量計、酸素チューブ、吸引器の接続し、モデル人形に酸素マスクと経鼻カニューレを装着した。在宅吸引器や気管内チューブなどを用いて演習を行った。

演習では、事前学習状況や学内演習の有無などを確認した後に、酸素投与や吸引が必要な状況、および必要物品について説明した。学生がこれらの物品を触わり確認した。

次に、口腔内吸引の留意点を説明後、学生はディスプレイ手袋を装着し、滅菌チューブを開封して吸引器に接続し、吸引を行った（写真1）。



【写真1：口腔・鼻腔・気管内吸引ブース】

（2）皮下注射・筋肉内注射

学生の理解度を確認し、学生から解剖生理の説明について希望があったため、モデル人形を使用し、上腕の神経や血管走行を説明した。その後、三角筋への筋肉内注射の一連の技術や対応をデモンストレーションした。そして、学生同士で実践練習を行った（写真2）。その後、臀部のモデル人形を使用し、中殿筋への筋肉内注射の練習を行った。

（3）バイタルサイン測定、呼吸音聴取など

バイタルサイン測定の目的や方法について確認後、シミュレーターを活用して、呼吸音や心音の聴取時に聴診器をあてる位置を確認したり、呼吸音や心音、腸蠕動音の聴取および血圧や脈拍測

定などを行った（写真3）。



【写真2：皮下注射・筋肉内注射ブース】



【写真3：バイタルサイン測定・呼吸音聴取ブース】



【写真4：胃管チューブ挿入と管理ブース】

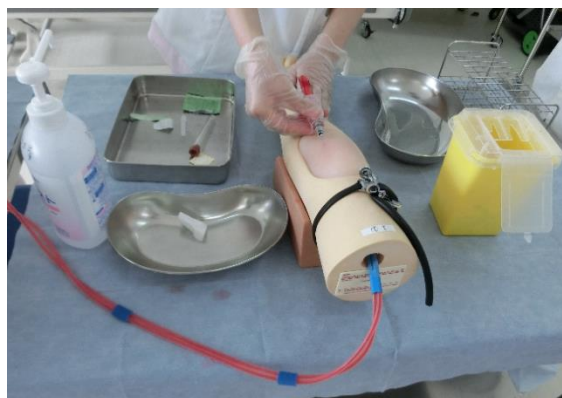
（4）胃管チューブ挿入と管理

解剖モデルを用いて口腔や鼻腔から胃までをイメージしながら胃管挿入時の留意点を確認し、

教員デモンストレーション後、胃管チューブを用いて胃管挿入の練習やチューブ固定などを行った（写真4）。

（5）静脈血採血・静脈内注射

注射器や注射針など滅菌物の取り扱いや留意点などの説明を行った後、静脈内注射モデルを用いて注射器と注射針を使用し、採血や静脈内注射の練習を行った（写真5）。



【写真5：静脈血採血・注射ブース】

（6）点滴、輸液ポンプ・シリンジポンプの操作と管理

輸液ポンプやシリンジポンプの取り扱い方法、使用上の留意点など説明し、各種ポンプ動作確認や点滴のセッティング、管理方法などを体験できるように運営した（写真6）。



【写真6：点滴、輸液ブース】

（7）導尿

導尿時の必要物品や留意点などを確認した。滅菌手袋の装着および滅菌物の取り扱いについて実践し、陰部モデルを用いて導尿の練習を行った（写真7）。



【写真7：導尿ブース】

III. 倫理的配慮

本研修は大学の授業科目とは一切関係なく、他大学との連携運営による参加希望学生への支援のために実施されたものである。

研修運営について、今後の検討を行うために、学生に無記名のアンケート記述を依頼した。本アンケートは、研修運営を検討するために使用することや無記名であること、結果の一部を紀要の実践報告などに活用する可能性があること、そして、アンケートの提出をもって了承が得られたこととするを口頭で説明した。また、提出は強制ではないことを伝えた。

IV. 研修の状況と今後の課題

1. 研修の状況

一部の学生は、看護技術の教科書や演習資料を持参して学習していた。また、新たなことを実施するため不安な感じが感じとれた。研修が開始すると、教員の説明を一生懸命聞きながらメモを取り、時折、教員に質問する姿が見られた。また、実施の時には手技や留意点などを学生同士で確認しあっていた。

一例として皮下注射・筋肉内注射のブースの学生の技術習得状況について説明する。

学生は上腕の血管や神経走行について理解した。また、上腕の三角筋が発達した筋腹を穿刺部位として選定し適切に筋肉内注射を実施できるようになった。

他ブースも同様に学生が実践を繰り返し、技術を修得していた。

2. 研修後の学生の反応

研修の良かった点としては、看護技術について「実習でやったことの復習になった」また、「今までの演習でやったことがない技術もできてよかった」「少数の人数に対して、先生が1人付き添ってもらい、細かな点まで教えていただいた点が良かった」などと述べていた。そして、「実際に臨床で行うことや、重要なことを改めて理解できた」などの意見が聞かれた。

また、「演習で習ったけど実習では見学のみだったという技術をもう一度行えたことは、4月から就職する上で少し不安が軽減されたと思います」「実際に臨床で行うことや、重要なことを改めて理解できた」などの発言が聞かれた。

各ブースでの実践は、少人数制であり、学生は十分に実践する機会が得られたと考えられる一方で、研修の改善点としては、「1日で自分のやりたいことができなかつたのが少し残念」「もう少し時間を長くしてほしい」などの要望があった。

学生は、「先輩からの指導についていけるか」「技術、職場になじめるか」などの不安も感じていたが、今回の研修により、「他大学の教員がいたことで緊張感がでた」「他大学の学生とも話す機会となり、病院で4月から働いていくことのイメージが少しできた」などの意見が聞かれた。一方で、「他大学の学生とは話すきっかけがなく会話ができなかつた」という意見もあった。

他大学との合同研修について、学生は「他大学の先生もとてもやさしく丁寧に現場の話もしてくださり、ためになりました」など概ね好印象であった。また、「自分が習ったことを他大学がしていなかつたり、その逆もあり、就職すれば皆一か

ら学び直さないといけないと感じた」など他大学との学習内容の違いや就職に向けた準備が必要などの意見もあった。

3. 研修の評価と課題

臨地実習は、看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法の一つであり、知識と技術の統合を図り、看護の受け手と関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養う重要な機会であると言われていた（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会，2011）。しかし、COVID-19禍で卒業する学生は、臨地実習での体験ができておらず、様々な看護技術の実践に不安を抱えていると考えられ、就職までに看護技術の練習を行う機会を提供する必要がある。

研修では、学生は熱心に教員へ質問しながらモデル人形に看護技術を実施していた。その状況と研修後の感想から、今回の研修によって自分の看護技術を再確認し、わからなかつた技術を理解する機会になっており、学生の就職後の看護技術の不安を軽減する一助になったと考える。

また、学生からは、「4月から働いていくことのイメージが少しできた」などの意見が聞かれたことから、研修が、就職後の新たな人間関係の中で勤務していくための人との関係作りの支援となったと思われる。他大学との合同研修により、初めて会う人とグループを組むなど在学中に経験できなかった体験や卒業後の社会人となる心構えの機会にもなった。

一方で、梅花女子大学の学生参加数が少なかつたことから、藍野大学の大半の学生は、同大学の学生同士のグループになった。学生の対人関係の不安を少しでも軽減する機会にするためには、他大学の学生同士でグループを結成し、交流する機会を作る必要があると考える。

運営の課題としては、梅花女子大学の学生の参加が少なかつたことがあげられる。その原因として、対面で募集説明や質疑応答ができなかつたこ

とやアナウンスの時期が遅く、多くの学生が既に予定があり研修に参加できなかったことが原因であると考えます。今後は、研修の説明を早めを実施する必要がある。また、多くの学生が参加できる機会を検討する必要があります。

研修項目については、学生の要望があった看護技術項目を選定することや、リアリティショックを軽減するために臨地で必要な技術項目を臨地実習施設などに意見を聞き、検討することも重要であると考えます。

運営にあたって、多数の看護技術の実践を行うためシミュレーターや器材などを確保することも必要である。

謝辞

今回の卒業直前研修について協同実施をご提案頂き、企画から実施まで全面的にご協力下さいました藍野大学大学院看護学研究科研究科長西上あゆみ先生と看護学科長本多容子先生に感謝申し上げます。また、本研修の校内準備や共同運営を行って下さいました藍野大学看護学科教員の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

公益社団法人 兵庫県看護協会 (2021) .2020 年度ウィズコロナ社会に対応する新人看護師教育のヒント. 公益社団法人 兵庫県看護協会, 1-20. (参照日 2021 年 9 月 15 日) .

<https://fields.canpan.info/report/download?id=33556>.

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2011) .大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.文部科学省, 1-28. (参照日 2021 年 9 月 15 日) .

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf.